**執筆者の所属する訪問看護事業所：**

例）〇〇〇〇訪問看護ステーション

**執筆者氏名：**

例）田中 看子

**執筆者職種**：

例）看護師・管理者

**執筆者プロフィール：（客観的事実を中心に60文字以内／程度　ここで約1行半ほど）**

例）大学病院でわずか3年の臨床経験から、退院後の患者に関わりたいと訪問看護の道に入る。後悔しない看取りを提供。訪問看護認定看護師。

＜記事内容について＞

■ 記事本文トータルで1,000～2,000文字ほどが理想ですが、こだわり過ぎず内容重視で執筆ください。（文章をマウスドラッグで選択すると下部のバーに文字数が表示されます）

■ 訪問看護の仕事に誘うような作られた内容である必要はなく、事実や感じていることなどを素直に書くほうが伝わります。

■ 画像を挿入したい場合は｢ここに〇〇の画像｣など説明書きをお願いします。

■ 下部の例では執筆しやすいよう3つの見出しと本文にパート分けしていますが、2つや4つのパートに分けて頂いても構いません。最初に見出しを作ると構成しやすいです。

■ 自社ホームページのブログなどをそのまま引用することは控えてください。ただしリライト（書き直し）されたものであれば内容が似ていても構いません。

■ 必要に応じ専門ライターが校正等いたしますので、自信をもって書いてみてください

＜ファイルの添付について＞

■ 入力いただいた本Wordファイルを添付してください。

■ トップに表示させる画像を1枚添付してください。（なければイメージ画像で代用）

■ 執筆者の画像を添付してください。（なければ人物アイコンで代用）

■ 必要に応じて本文内に掲載したい画像を添付してください。

＜ファイルの送信先＞

メールでお送りください： info@houkan-job.com

題名：記事掲載について

**記事のカテゴリー：（使うカテゴリー以外を削除してください）**

・訪問看護のお仕事（お仕事全般に関わる内容。下記になければこのカテゴリー）

・現場レポート（実際に働いている様子や業務内容のレポート）

・訪問をやっていてヨカッタ（素直に｢ヨカッタ｣と感じることやエピソードなど）

・こんな工夫をしています（在宅医療に工夫はつきもの。家にあるこんなモノを…など）

・事業所紹介（事業所の紹介をご自由にどうぞ）

**記事のタイトル：（30文字以内／程度）**

例）訪問看護にコミュニケーション能力は必要か？

**見出し１：**

例）一般的によく言われる話として…

**本文１：**

例）

｢訪問をやるならコミュニケーション能力は必須！｣
これはよく聞かれる話ですので、ちょっとでも訪問看護に興味がある方ならどこかで目にしたり耳にしたりしたことはあるでしょう。

一般論として、それはかなりの部分で正解です。
利用者様のご自宅にお伺いする際、多くのケースでは一人で訪問します。そこでどう振る舞うのかはもっとも重要な要素の一つです。いくら技術的に長けている看護師やセラピストでも、コミュニケーションのとり方次第で利用者様からいわゆる｢NG｣が出てしまうこともしばしばです。

他にも、コミュニケーション不足で生じる弊害がたくさんあります。

・健康状態に関する十分な情報(S情報)収集ができない。

・利用者様にとって、訪問者と関わること自体がストレスになりかねない。

・必要なときに必要な情報を発信してくれなくなる。

こういった弊害が出てしまっては、訪問する意味さえわからなくなってしまいますね。

**見出し2：**

例）コミュニケーションが苦手な人は訪問に挑戦できないのか？

**本文２：**

例）

これは一概に｢No｣とは言えません。
苦手であるということと実際の対応とは、それはそれでまた異なる話だと考えてください。

コミュニケーションができるかできないかは、もともとその人が持っている資質に関わることもあれば、経験によりスキルとして伸ばしてきた部分も大いにあります。つまり、もともと社交性があるかどうかはさほど問題ではなく、これからどうやってコミュニケーション力を伸ばしていこうかという、取り組む気持ち次第で育んでいけるものでもあるということです。

周りを見渡してみてください。
「あの人は話し方は上手じゃないけれど、一生懸命さが伝わって好感がもてるよね」
「あの人は普段は面白くて話しやすいのに、患者さんからはあまり好かれていない感じがするね」
といったように、話が上手かどうかだけがコミュニケーションではないのです。

｢誰からも好かれるいい人｣にたまに出会うことがあると思いますが、そんな人しか訪問看護で働けないなんてありえない話です。いくらコミュニケーションが苦手だったとしても、自らそれを克服していこうという気持ちと、実践的にそれを解決できる環境さえ整っていれば、経験が人を変えていくこともできるのです。

**見出し３：**

例）自信がなければ相談しましょう

**本文３：**

コミュニケーションに不安があるという理由で、こんなにもやりがいのある訪問看護への道を諦めてしまうのは非常にもったいないです。
働いてみたい訪問看護ステーションが見つかったら、そこの担当者に素直に相談してみましょう。

「私はコミュニケーションが苦手です。それでも現場で役に立てますか？」

｢心配ないですよ｣という返答がほぼ100％返ってくることを断言します。
それだけの理由で落とされることはありませんし、逆に言えば、｢それだと無理ですね｣と返答するようなステーションで働くあなたに良い未来はありません。｢うちはまともな教育ができませんよ｣と言っているようなものですから。

訪問看護で働けば、そこにはコミュニケーション能力に長けた先輩がたくさんいます。環境が人を慣れさせますし、そういった訪問の先輩方を見ながらスキルを養っていくことができます。
そういった人たちも最初からコミュニケーション上手だったかといえば、必ずしもそうではありませんから。

看護技術と同じで、コミュニケーション能力だってあとから育んでいくことが可能です。勇気を持って門を叩いてみてください！